

## 第2節 作文指導の戦略—書くことへ向かう意志を育てる

### 1 作文指導の今日的課題

表現指導における「書くこと」の学習指導すなわち「作文指導」を問うときに最も重要なことは、まさに「書くこと」と「作文指導」とを有効につなぐことである。学習者の日常における「書くこと」と国語科の授業における「作文指導」とを、直接関連づけることを工夫してみたい。子どもたちが文章を書かないという声をよく耳にするが、彼らの実態としてはかなり多くの「書く」活動に携わっている。その実例として、子どもたちが携帯電話を所持してメールの交換に熱中する場面を直ちに想像することができる。さらにインターネットを通して膨大な量の書き込みがなされる場面において、書き込む主体はほとんどが若い世代である。彼らはまた、「ブログ」と称される日記を精力的に書いて公開し、「ブログ」と称される自己紹介の文章を交流して、ネット上で「友人」を獲得している。彼らは決して書くことが嫌いではない。このような子どもたちの現実を的確にとらえたうえで、「書くこと」へと向かう意志を生かした授業構想が求められる。授業という場所で学習者の日常に内在する表現意欲を喚起すること、すなわち「書くこと」に対する興味・関心を育てるという点を、作文指導の主要な意義・目的として位置付けておきたい。

『月刊国語教育研究』の「問題提起」<sup>1)</sup>において、府川源一郎はいま多くの学習者の間でもはや例外なく所持され、最も身近なコミュニケーション・ツールとなった携帯電話に着目していることは第1章でも触れた。府川は、「ケータイ作文の可能性」と題するこの「問題提起」の中で、学習者の現実に着目し、その現実の中にある素材を「切って捨てる」ことをせず、逆にその素材の「可能性」を取り上げて、新たな授業を構想しようとする。

府川の言う「ケータイ作文」とは、まさしく学習者の現実の中から立ち上げられた国語科の学習活動にほかならない。携帯電話によるメール交換に加えて、ホームページへの「書き込み」にも着目することができる。インターネット上には多様な「書き込み」のためのホームページが設けられているが、若い世代を中心に膨大な量の書き込みがなされている。それらの書き込みには、感情的かつ断片的な内容ばかりではなく、ネット上でのディベートとも称すべき論理的なことばの応酬も見られる。多くの「掲示板」には、若い世代からの膨大な書き込みが溢れている。それらの表現に生き生きとした彼らの個性を見ることができる。携帯電話にホームページへの書き込みを含めた「ケータイ作文」の可能性を追求してみたい。これからの作文指導では、府川の言う「文章の『現在』を、ほかならぬ教室の中で創り出していく可能性」を開くことを、一つの目標として位置付けておきたい。

「ケータイ作文」と言っても、もちろん携帯電話やインターネットの掲示板をそのまま教室に持ち込むわけではない。冒頭で言及したように、子どもたちの「書くこと」と学校の「作文指導」とを有効につないだ授業を工夫することが、実践的課題となる。すなわち子どもたちの「現実」と「学校」という場所の間の境界を越境して、開かれた場所での作文教育を考える必要がある。この点に関して、斎藤美奈子は次のような指摘をしている。

戦後の作文教育に落とし穴があったとしたら、学校作文が「学校」という閉じた空間の中で特殊な進化をとげすぎたことだろう。隔離されたコロニーの中で近親交配を重

ねたために、生物の形質が固定化し、適応力を失ったようなものである。<sup>2</sup>

この「落とし穴」を埋める機能を有するものとして、斎藤は多くの大人用の「文章読本」を位置付けるわけだが、ここでは「閉じた空間」を開くこと、すなわち子どもたちの「いま、ここ」を教室に取り込んだ授業構想によって、問題解決を目指すという方向を考えてみたい。

「書くこと」の授業構想において特に配慮したいことは、次の5点である。

- ① 書くことに対する学習者の興味・関心および意欲を喚起すること。
- ② 書くことの効果的な教材を発掘すること。
- ③ 学習者を円滑に書くことへといざなうための課題を工夫すること。
- ④ 書くことの具体的な場所を設定すること。
- ⑤ 個人・グループ・クラスの各レベルにおいて学習を展開し、「教室の文化」を生かした効果的な評価を実施すること。

まず初めに、「書くこと」に対する学習者の興味・関心と、表現意欲を喚起することが、作文教育の大きな目標である。続いて、興味・関心を喚起できるような力のある教材を発掘する。授業の内外で、必ず「書く」という具体的な活動の場面を設定することも重要である。そのために、「書く」活動にいざなうための学習課題の意味も大きい。学習者が書いた作文は、グループおよびクラス単位の検証を経て、再度個人へとフィードバックしたうえで、よりふさわしい表現に向けての視野を開くことができれば、今回提案する作文指導の目標は達成できる。

## 2 作文指導の戦略

ところで、これからの学校は「文化の伝達」という目的意識を超えて、もっと大胆に学習者にとって楽しくかつ面白い要素を、様々な場面に取り入れる努力をするべきではないだろうか。教師はまず教科担当者として、担当科目の授業内容に楽しい要素をいかに導入するのかを真剣に模索しなければならない。それは一つの「戦略(ストラテジー)」でもある。国語教育は今後、戦略としての要素をはっきりと前面に出して、学習者にいかに楽しくかつ価値あることばの活動をさせるかという点を追求するべきである。「戦略」ということばは、字義からすれば「戦争」の「策略」ということで、ネガティブなニュアンスを伴う。それをポジティブな方向に転換させながら、国語教育の新しいコンセプトとしてとらえ直すことを本研究では提案する。そして作文指導の領域においては、「書くことへ向かう意志」をいかに有効に引き出すかという課題に対応する戦略が求められることになる。

1989年版の高等学校学習指導要領では、表現の重視という方向性が示されているが、この方向は「言語の教育」としての立場が明確にされるようになってから、学習指導要領が改訂されるたびに強調されてきた。1999年版でも、表現重視の方向は継続された。しかしながら学習指導要領の理想とは裏腹に、中等教育特に高等学校の現場では表現指導が活性化しているとは言い難い状況にある。学習指導要領に「国語表現」が設置されたものの、その開講率が低迷しているという事実が、表現指導の現状を端的に物語っている。

このことは、上級学校への進学という受験制度の問題と深く関連する。すなわち多くの高等学校の現場では、大学入試に対応するために文章の読解に関する指導を中心に据えて

いる。作文指導も、受験に関係する「小論文」の指導が中心になってしまっている。それに加えて、提出物の処理に多くの時間を費やすという理由から、授業以外の業務に忙殺される教師にとって、作文指導の充実は苛酷な課題とも言える。

中学生や高校生が文章を書くことができないとか、話し方を知らないという声をよく聞くが、本来彼らは表現することが好きはずだ。ただ自分の感情の表現がうまくできないだけである。彼らの内にある「書くことへ向かう意志」を目覚めさせ、適切な課題を手引きとして与え、表現のための具体的な場面を設定すれば、必ず生き生きとしたことばで表現する。ここで、表現には次の二つの要素があることを確認しておきたい。

- ① 自己を表現するという要素。
- ② 他者とのコミュニケーションのための表現という要素。

自分自身の感情を内部に閉じ込めたままにしておく、学習者は感情のコントロールができずに「キレル」ことになる。たとえば「ウソ、エーッ、ムカツク、カワイイ、キモイ」などの断片的な感情表現のことばから脱却して、自己を表現することばを身に付けさせることは、重要な課題にほかならない。それは他者とのコミュニケーションの問題にもつながる。携帯電話での饒舌なことばの応酬は、仲間うちの単なる連帯感の確認にすぎない。その段階を超えて、本来のコミュニケーションを目指さなければならない。学習者の自己表現の要求を満たすことによる達成感と、他者とのコミュニケーションを開くことによる充足感、精神的な安定にもつながる。これらの二つの方向にそれぞれ配慮することが、作文指導の前提となる。

### 3 戦略への階梯—目標・教材・指導法

「書くこと」の授業を構築するに際して第一に目標とするべきは、次のような事項である。

- ① 表現に対する興味・関心の喚起。
- ② 表現意欲の喚起。

この二点は相互に密接に関連する。そして表現活動のための前提になる要素として、きわめて重要なものである。表現指導の戦略という観点からすれば、まさにこれらの点に最も配慮しなければならない。この点は、田中宏幸が詳細に考察した「インベンション指導」の領域に深く関わる。田中は次のように述べる。

「書くに値する内容」を発見させ、「書く意欲」を喚起する指導が「インベンション指導」である。私はこれまでの実践研究を踏まえて、この「インベンション指導」を具体化していくことで、コンポジション指導の行きづまりを打開することが可能になるのではないかという仮説を持つようになった。<sup>3</sup>

田中は国語教育史と自身の高等学校における表現指導の分析を通して「インベンション指導」の重要性を明らかにしたうえで、この仮説を検証した。本節で言う作文指導の戦略は、コンポジションの指導以前に、インベンション指導においてまず試みられるべきである。

表現指導の目標として、前記①・②に加えてさらに次のような事項を考えておきたい。

- ③ 表現のための場の設定。

④ 学習者を円滑に表現の活動へと導く手引きの工夫。

すなわち、単に表現理論を教え込むだけではなく、必ず学習者が実際に表現する場所を授業の中に設定する必要がある。表現指導は、活動を伴うことによって成立する。いかに効果的な表現活動の場を設定するかが、指導者側の工夫にかかっている。さらに無理なく表現活動へと誘導することができるような、適切な「手引き」の工夫も必要不可欠なことである。そして表現活動を通して達成されるものとして、次のような目標が立ち現れる。

⑤ 表現することの楽しさ・充実感の体得。

ひとは生きている限り、必ず何らかの表現行動を取る。表現することは、生きることと同義でもある。この表現の原点とも言える特色を踏まえて、表現の楽しく充実した要素を指導に生かすようにしたい。

以上の五点の目標にそれぞれ配慮した指導を実現することが、戦略の基本である。

目標に続いて、表現のための教材に関して検討する。読解の領域と比較すると、表現指導のための教材の開拓はあまり積極的に実施されない。教科書においても、読み教材のように「安定教材」として多くの現場で共通して用いられるようなものはない。

わたくしは教材のパラダイム転換を試み、学校外の「サブカルチャー」を学校の「メインカルチャー」とつなげる工夫をして、実際の国語科の学習活動に導入する試みを続けている。具体的には、これまで学校が積極的に取り入れることがなかった漫画、アニメーション、音楽、映像、テレビゲーム、携帯電話その他のメディアに関わるものの教材化である。これらのメディアは学習者から圧倒的な支持を得ているにもかかわらず、学校教育とりわけ授業という場所では冷遇され続けてきた。それを教材として取り入れることは、国語教育の「戦略」として、単なる指導の「工夫」の域を超えた授業改革の試みとなる。決して学習者に迎合するわけではない。最大の目標は、国語学習に対する学習者の興味・関心の喚起という点にある。この教材の戦略は、特に表現指導の領域において効力を発揮する。

指導法についてわたくし自身の実践では、原則としてすべての授業で毎時間、「研究の手引き」と「授業レポート」および「研究資料」と称するプリントを準備して、それに即した展開を工夫している<sup>4</sup>。すでに長期間にわたってこの方法によって授業を組織しているが、毎回担当者側の負担相応の教育効果を確認することができる。「研究の手引き」には、その授業の目標、学習活動、評価の観点、課題、次回の予定などを整理する。「研究の手引き」によって、学習者が授業の目標や課題を随時確認し、的確な学習活動が可能となる。また「授業レポート」は、学習者が授業の展開に即して記入をして、授業終了時に提出する。「授業レポート」で個々の学習者の状況を可能な限り把握し、常に効果的な授業内容を模索することになっている。また「研究資料」には授業に関連した参考資料を載せて配布する。

表現指導の目標の第三点として掲げた「表現のための場の設定」という事項に関連させれば、「授業レポート」はまさに「場」として機能する。毎回提出となる緊張感は、学習者の意識を表現することに向かわせる。また、書くことによって考えをまとめるという練習もできる。さらに個々の学習者の学習活動を評価する際にも「授業レポート」は効力を発揮する。そこには、学習者の自己評価と、グループ学習時の相互評価の要素も含まれている。そして担当者による評価も、個人、グループ、クラスの各レベルにおいて、様々な形で取

り入れることにする。「授業レポート」に収録される学習者のナマの声に耳を傾けながら、授業を進めるように心がけてきた。あくまでも一つの実践例ではあるが、このような「研究の手引き」「授業レポート」「研究資料」を用いた指導によって、指導内容の徹底および充実を図ることができる。表現指導の面においても、積極的な導入を試みたいところである。

#### 4 日常生活における「書くこと」の基盤創り

作文指導は、国語科の授業時間の中のみで完結するものではない。子どもたちの日常の中に、「書くこと」につながる活動を位置付けることから出発する。作文指導は文章を書くという時点から始まるものではなく、文章を書くための前提として日ごろから様々な学習を積み重ねる必要がある。特に「何を書いたらよいのか分からない」という問題に対応するために、学習者の中に「書くべき内容」をいかに蓄積させるかということを考えなければならない。実際に文章を書く段階の指導との関連に配慮しながら、「インベンション指導」の方向<sup>5</sup>を重視した学習指導を工夫する必要がある。

「書くこと」の学力、すなわち確かな文章表現力を育成するためには、表現技法の指導の前に、まず発想を豊かにして認識力を深めることを考えなければならない。その点は作文教育の基本的な段階から扱うべき事項である。その際に重要なことは二つある。その第一として、国語科の授業特に作文の授業の中だけで扱うべきことではなく、学習者の日常の言語生活において常に意識的に取り組むことができるように配慮することが挙げられる。そして第二は、国語科の授業の中で自然に学習を展開することができるように、すなわち学習の習慣を身に付けることができるように配慮することである。いずれの場合にも、常に「書くこと」との関連において実践を展開する必要がある。以下に、それぞれの点について具体的な実践に即して紹介する。

豊かな「書くこと」の学びに向けて発想を豊かなものにするための前提として、発想のもとになる知識や情報を豊かにすることを工夫しなければならない。学習者にいかに効率よく、多くの知識や情報をストックさせるかという問題に対しての具体的な方策が必要になる。それを国語科の学習において実現させる場合の一つの方法として、「年間課題」という形で日ごろから彼らの意識の中に国語と関わる要素を可能な限り多く取り入れることを提案したい。言うまでもなく、国語の学習は授業時間の中だけで完結するものではない。国語科は日常生活において常に用いられることばを直接学習する教科ということで、日ごろからことばに対する関心と問題意識を高めておく必要がある。次に、作文教育の基盤を形成するための具体的な「年間課題」の実例を3例示す。なおここで言う「年間課題」とは、国語科の学習課題として学習者に年間を通して自主的に取り組ませるものである。なおおたくしはすでに、授業時間数の削減に対応するための方策として、これらの年間課題に言及したことがある<sup>6</sup>。

##### ① コラム（社説）を読む

まず初めに、身近な情報源として新聞を取り上げる。新聞を読むという活動を国語科の学習課題として位置付けることができる。新聞を教材とする学習指導の試みは「NIE」（教育に新聞を）の実践を通してよく知られるところとなった。昨今ではメディア・リテ

ラシーの学習において、新聞が注目されている。年間課題としては、家庭で講読している新聞のコラムもしくは社説の欄を国語科の教材として取り上げることを提案したい。多い場合は毎日、少ない場合でも1週間に1回程度、新聞のコラムまたは社説の欄を切り抜いて、専用のノートに貼り付ける。コラムか社説のどちらにするかは、対象となる学習者の学年で判断する。社説は上級学年に適した教材となる。

ノートに貼り付けたコラム・社説は、一読して読めない漢字や意味不明な語句を抜き出して、国語辞典その他で読み方と意味とを調査する。コラムには一般的には表題がつけられていないので、その内容から判断して有効な表題を付けるようにする。その後で、コラム・社説の要旨を全体の10分の1程度の長さに要約する。このような課題に定期的に取り組むことによって、新聞の記事を読んでその内容を要約する習慣が身に付くことになる。

新聞のコラムもしくは社説を読んでその内容を要約して書くことによって、漢字・語句の学習はもちろん、書く活動を通して要点を確認しながら読むことの学習を展開することができる。その一方で学習者は、日ごろから身近な話題・題材に対する多くの情報を獲得する。コラムや社説に登場する様々な今日的な話題が、学習者の中に少しずつストックされることが重要である。それは発想の前提となる情報として、彼らの内部に蓄積されることになる。

## ② 読書ラリー

新聞とともに本から得る様々な話題も、貴重な情報源となる。いま国語教育の現場では、「ブックトーク」や「読書へのアニメーション」など、様々な読書指導が試みられている。「朝の読書」という形態で、学校全体もしくは学年単位で読書指導を推進する現場も増えつつある。そこで国語科の年間課題の中に、読書に関するものを含めておきたい。「読書ラリー」と称する課題<sup>7</sup>は、あらかじめ読ませたい本のリストを作成してそれぞれの本に点数を与えるところから始まる。リストから自由に本を選んで読み、「読書の記録」と題するプリントにその成果をまとめるようにする。提出された「読書の記録」は教師が点検して、その内容に応じた点数を与える。その際の最高得点はリストに示した点数とする。「読書の記録」の内容によっては、大きく減点される場合もある。ノルマを決めて、そのノルマとした点数を超えるだけの本を読むように指導し、その点数は平常点として評価に取り入れる。ゲームの要素を多少なりとも取り入れた試みによって、読書生活を豊かにすると同時に、作文のための前提となる発想のストックを広げるといった効果が期待できる。

## ③ ワード (フレーズ) ・ハンティング

作文の原点にことばがある。ことばに対する意識を明確にして、様々な語彙を増やすということは、発想を耕すことに直結する。そこでことばに関わる年間課題の例も紹介しておきたい。一つは「ワードハンティング」と称する課題<sup>8</sup>だが、これは学習者が身近な場所からさまざまなことばを採取するというものである。新聞や本はもちろん、CM、テレビ番組、テレビドラマ、映画、ゲーム、歌の歌詞など、身近な場所から新しく出会ったことばや意味を確認名しておきたいことばを選んで、B6サイズのカードに一枚に一項目ずつ記入する。見出し語として記入し、カードには続いてそのことばの意味、用例、出典、採取年月日などをしっかりと記入する。少しずつことばのストックが増えたところで、グループ学習の形態によって情報交換をして、相互に集めたことばについて確認をする。クラスメートが採取したことばによって、さらにことばのストックは拡大することになる。

単語にとどまらずに、成句の単位で採取させることもできる。「フレーズハンティング」と称するもの<sup>9</sup>だが、ことばから表現へと学習者の興味・関心を育てることが目標となる。「ワードハンティング」と同様にB6サイズのカードに一枚一項目を厳守してまとめる。ことばとともに表現に対する関心を育てることは、彼らの意識を着実に作文へと向かわせるものである。

ここでは年間課題の実例を三例紹介したが、中学校および高等学校のどの学年においても必要に応じて取り入れることができる。現場の実態に応じて適宜取り入れるようにしたい。授業時間数の削減という制度への対応としても、授業時間意外の場所で学習者が自主的に学習に取り組むように導くことは大いに効果を発揮する。年間課題は、年間を通して継続的に取り組むものである。継続のためには教師の側の努力が不可欠となる。学習者が課題に取り組んだ成果は必ず授業時に持参させて、提出させるようにする。教師はノートやカードを点検してから返却する。点検にかかる時間と業務量は膨大なものになるが、教師の取り組みが年間課題の成否を決めることになる。

「書くこと」の学習は授業時間の中のみで完結するものではない。日ごろからことばと関わる生活を送る学習者が、どのような方法によって多くの情報を獲得するかということを検討する必要がある。年間課題を通して得た情報、および学習の習慣は様々な国語科の学習に効果的に生かされる。特に「書くこと」の学習指導においては、発想の源となる情報の獲得が必要となる。年間課題の実践によって、発想を豊かなものにするためのストックを着実に育てておきたい。

## 5 表現課題の工夫

前の項で表現指導の目標、教材、指導法に関してそれぞれ言及したが、本項では授業内容に即して具体的な戦略に関する考察を進めることにしたい。表現の授業を組織するためには、第一に具体的な活動のための課題を提示することが必要となる。ただし、単に「何か話したり書いたりしてみよう。」という漠然とした課題で、学習者が自主的に表現活動を展開することはない。活動のための、的確で具体的な課題を設定する必要がある。その課題が教材との相乗作用によって、いかに効果を発揮するかが戦略の要点となる。ここでは府川源一郎の実践<sup>10</sup>を具体例として取り上げながら、表現指導のための課題に関して考察する。

教材との関連からすれば、課題にはまず次のような条件が求められることになる。

① 教材の中に、具体的な表現の課題が含まれていること。

表現指導の場合、まずは教材が表現活動のきっかけとなるように配慮する。特に教材を提示するとき第一に留意すべきは、教材の中に具体的な課題が含まれているという点である。

府川の実践では、次のようなまどみちおの詩が教材化されている。

( )

手製の

おりに

はいつている

府川はこの詩を板書して、詩の題名について考えさせた。様々な考え方の交流を経て、作者（まどみちお）の題名「シマウマ」を示すまでの過程において、学習者は多様な学習をする。この実践において、まどみちおの詩は教材ではあるが、同時にタイトルが空欄になっていることから、表現のための課題が教材の中に自然に組み込まれている。しかも「見立て」という表現技法について考え、さらに創作活動へと展開できる意味で、きわめて有効な教材である。わたくしはこの府川の実践に学んで、「シマウマ」にさらに新たな教材を関連させた授業を展開する。見立てというレトリックに関する理解をより確かなものにするのが目的である。例えば佐藤雅彦の次のような作品<sup>11</sup>は適切な教材となる。

（ ）

拳銃を持った男がいた。

そこへさらに拳銃を持った男が帰ってきた。

ちなみにこの空欄には、「交番」という題名が相当する。その他、様々な見立ての詩を教材化することができる。

② 課題が、学習者の興味・関心を喚起するものであること。

「シマウマ」や「交番」のように、何よりも学習者の興味・関心を喚起できるような教材を発掘しなければならない。このことは、前の節で話題にした表現指導の目標と関連する。課題自体に学習者が興味・関心を持つことは、表現意欲の喚起のために不可欠な要素である。

③ 課題で何をすればよいかということが、学習者に直ちに理解できること。

ここで例とした府川の実践では、題名になったことばを連想して答えるという具体的な課題があつて、学習者は直ちに書いたり発表したりする表現の活動に入ることができる。このように、学習者自身が課題の内容を的確に理解し、円滑に取り組めるように配慮したところである。

④ 課題が、学習者にとって無理なく取り組むことができる内容であること。

この点もまた、これまでに掲げた条件と密接に関連する。面白いけれども手数がかかってなかなか課題が終わらないというのでは、効果的な表現指導を推進することはできない。学習者が手軽に取り組むことができる課題を工夫するべきである。

先に表現指導の目標として、学習者を円滑に表現活動へと導く手引きの工夫という点を掲げたが、それは換言すれば適切な課題の設定ということである。本節では指導の戦略となる要素としての課題に着目して、具体的な実践に即してまとめてみた。

## 6 総括と課題

冒頭で引用した府川源一郎の「ケータイ作文の可能性」では、生活綴り方における洋紙と謄写版という印刷技術の普及に着目し、携帯電話という機器の普及の中に「可能性」の一つの要素を見出している。確かにパーソナルコンピュータと携帯電話の普及という現実によって、子どもたちの表現世界は大きく変容している。その実態を的確にとらえたうえで、これからの作文指導を考える必要がある。

パソコンと携帯電話によって、メールという表現および通信の方法が普及している。携帯電話は通話よりもメール機能の方に重点が置かれるようになっている。子どもたちが意

欲的にメールの送受信を繰り返すという事実を目を向けて、「書くこと」へと向かう意志の方向性を確認しておきたい。そこには、情報のインタラクティブ性という特性が浮上してくる。そこには情報を一方的に送信するのではなく、相手からの返信を期待するという意志を見ることができる。ただし、それはあくまでも相手と直接顔を合わせての直接的なものではない、間接的なコミュニケーションに限定されるという点も重要な要素である。このような間接的な双方向の交信を可能にするという要素をメールの特性を把握し、それを教室での作文教育に取り入れることも工夫できる。

わたくしは中高一貫の私立学校に勤務した経験から、異なる学年の間でメッセージを交流するという形態を取り入れた「書くこと」の学習指導を展開したことがある<sup>12</sup>。高校生の授業で「後輩へのアドバイス」というテーマで中学生に宛てた手紙を書かせて、それを実際に中学生に読ませて評価させるという実践であったが、中学生・高校生の双方が相手からの反応に強い関心を寄せた。また「交流作文」と称して<sup>13</sup>、大学生の教職課程における「国語科教育法」の授業では、高校生に向けて短作文の課題を発信するという内容で展開し、実際に高校生に取り組ませたこともある。書かれた文章は相互に交流して、それぞれ評価を実施する。このように相手を想定して書くことは、今日のメールにおけるコミュニケーションにつながる。学習者の生活する「いま、ここ」の文脈の中から適切な状況を取り上げて、学習のテーマとする。そのテーマをめぐって異なる学年の間でのインタラクティブなメッセージの交流を実現することによって、作文指導の新しい可能性を開くことが期待できる。

本節では、学習者の表現へと向かう意志を生かした作文の授業構想について提案した。まず、彼らの日常から作文へと向かう姿勢を育成し、国語科の授業時には常に「書くこと」の場所を自然な形で設けることによって、無理なく書くことへと向かわせるようにする。そして作文の授業では、彼らのいる「いま、ここ」と学校とを隔てる境界を越境して、まず書くという活動へといざなう。そのために、興味・関心を十分に喚起し得る教材を用意する。そして彼らが抵抗なく、書く活動へと進むことができるように、取り組みやすい学習課題を提示する。授業中もしくは授業時間外にでも、実際に書くという活動を取り入れるというのは当然のことである。かくて書かれた作文は、グループレベルで相互評価を実施し、クラス全体においても吟味する場を設けることにする。そして最終的には個人へとフィードバックして表現を磨くことができる。教室には異なる個性を有する多くの学習者が集まっている。そこにはおのずと独自の「文化」が生成される。わたくしはそれを「教室の文化」と称しているが、この「教室の文化」を生かした評価を実施することも、作文の授業構想に含めておきたい。

本節では、主に学習者の表現に対する興味・関心の喚起という点を基盤とした授業に言及した。表現意欲を育てることが、最も重要な実践的課題と判断しているからである。子どもたちは本来、書くことが嫌いというわけではない。もしも学校で作文教育を受けることが彼らから書くことの楽しみを奪ってしまうとしたら、それはまさに本末転倒である。彼らが自らの生きる現実の中で少しずつ育んできた書くことへと向かう意志を学校では大切に、より広く大きな表現意欲へと育てる必要がある。

---

注

- 1 府川源一郎「ケー鯛作文の可能性」(『月刊国語教育』2003. 7)
- 2 斎藤美奈子『文章読本さん江』(筑摩書房、2002. 2)。
- 3 田中宏幸『発見を導く表現指導』(右文書院、1998. 5)。
- 4 「研究の手引き」「授業レポート」「研究資料」に関しては、第2章第5節で紹介した。
- 5 「インベンション指導」に関しては、注2の文献で論じられている。
- 6 町田守弘「国語科の効果的な学習課題を考えるー『二〇〇二年問題』という幻想を超えて(『月刊国語教育』2002. 3)
- 7 その内容に関しては、町田守弘「読書生活を豊かにする戦略ー『読書案内』バラエティ」(『月刊国語教育』2000. 8)で紹介した。
- 8 その内容に関しては、町田守弘「語彙を豊かにする戦略ー『ワードハンティング』の試み」(『月刊国語教育』2000. 6)で紹介した。なお本研究においては、第7章第2節において、注9の「フレーズハンティング」と合わせて詳しく紹介する。
- 9 その内容に関しては、町田守弘「身近な表現に学ぶ戦略ー『フレーズハンティング』の試み」(『月刊国語教育』2002. 1)で紹介した。
- 10 府川源一郎『「国語」教育の可能性』(教育出版、1995. 6)の「いささか長めのまえがき」において紹介されたもの。
- 11 佐藤雅彦『クリック』(講談社、1998. 3)に収録されたもの。
- 12 この実践に関しては拙稿「新しいコミュニケーションを開く戦略ー異学年交流に基づく表現指導」(『月刊国語教育』2002. 5)で紹介した。
- 13 「交流作文」に関しては、第6章第1節で紹介する。